



尾道市文化財保護委員  
尾道ユネスコ協会事務局長

写真家 村上宏治

# 【八朔巡礼物語り】

## 第4話

八朔の父と称される、  
西条農業学校 第一期卒業の田中清兵衛は…、その二

その地は広島県因島の田熊エリア。時は江戸時代末期の万延元（一八六〇）年。密厳浄土寺住職・恵徳上人が、寺領に偶然実生した果実を見つけたのが八朔の始まりとされています。雑柑として発見されたこの当時、正式な名前はまだ付けられていませんでした。

八朔の発見から二六年の歳月が過ぎ、いよいよその果実が名付けられる事になります。恵徳上人のつけた名前は……「八朔」。その八朔に情熱を注ぎ、幾多の困難を乗り越え、今にその八朔を伝えた人達がいました。



銅像設立時の記念写真。写真下中央が晩年の清兵衛氏。  
(因島田熊町の密厳浄土寺境内にて)

### 害虫被害そして、果樹の病気に尽力する清兵衛氏

時代は大正に入った頃、柑橘栽培は、若い力と最新技術で順風満帆と……誰もが思っていました。全国的な天候不順と害虫被害そして、果樹の病気に悩まされていきます。特にイセリアカイガラムシは大正初年に、他県から購入した苗木が原因で田熊村で発見され、害虫撲滅のため発生村では柑橘の木が伐採焼却されました。その数は二、七〇〇本。そんな中、田中清兵衛氏はイセリアカイガラムシの天敵、ベダリアアテントウムシに着目し、静岡県農業試験場より入手すると飼育を開始。ベダリアアテントウムシを飼育放飼することで、木々の伐採の必要はなくなり、その害虫被害がなくなったといえます。継続して田中清兵衛氏はベダリアアテントウムシを飼育し放飼。農家への配布数最大の年は三〇、四八〇匹を数え、昭和にかけて広島県下全般での被害報告は無く、撲滅宣言が出されました。大正十四（一九二五）年秋、田熊



害虫・イセリアカイガラムシ



天敵・ベダリアアテントウムシ



ベダリアアテントウムシ飼育室（白いガラス温室）  
写真提供：大信産業株式会社

に出荷組合が設立され、村農会技師を勤めていた清兵衛氏の指導のもと、組合長・岡野佐太郎、副組合長・村上寿一を先達に、「八朔」をはじめとした柑橘の販路拡大がはかられていきます。

### ◇因島市農業協同組合長

#### 田中清兵衛氏の

#### 回顧録より

大正十四年私は農業技術員として村農会に入り田熊に柑橘の出荷組合を作った。

そして大正十四、十五兩年を通じて八朔果実を東京および大阪に持参して宣伝に務めた。特に東京を目指した。その頃は大阪では既に真価を認められて、割合によく出荷されていたからである。その頃の八朔は十貫に対してネーブルオレンジより一円安位の値段で取引されていた。八朔の販路が早く広がったのは、尾道、福山であつて、これに次いで笠岡および岡山と広がっていった。

昭和三年に中国、四国農産物共進会があつたので、八朔を持参して宣伝に努力し、引き続き昭和四年岡山に博覧会が開催された。（中略）東京・千足屋へ持参して、店主に八朔を見せたところ「これは面白い」という事となり色々話した末、八朔と書いたのでは売れないと言ひ、とにかく任

せろという事になった。千足屋店主は早速家の前へ宣伝広告をなし、広島名産ハッサク・オレンジと書いたのである。

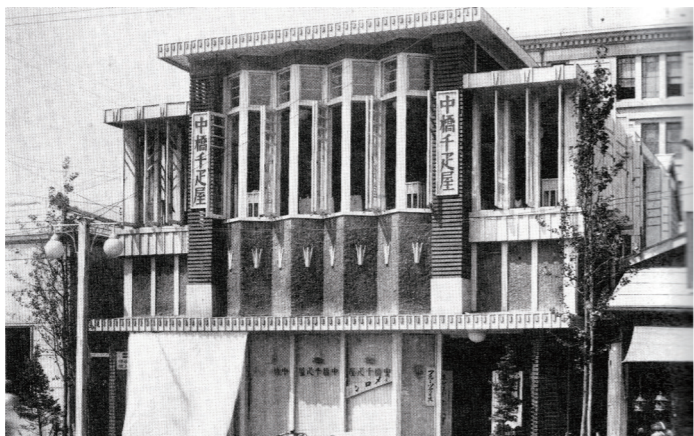
昭和四、五年、東京の千足屋では広島ハッサクオレンジ一個五〇銭で店売りしたが、飛ぶように売れたのである。当時地元では上物（じょうぶつ）で一個八〜一〇銭であつたから私も驚いた。千足屋ではまず表に立札をして広島名産ハッサクオレンジを宣伝しておき、店へコーヒーを飲みに入る客へ、二房宣伝用として別の皿に付けたところ、帰りには客は八朔柑を買つて行った。商人の宣伝というものは実に恐ろしいものであるとつくづく考えさせられた。その翌年には、千足屋の希望する包紙を用いた。

このように八朔柑の今日に至つたのには、宣伝これ大いに努めたという苦心があるが、特に東京への宣伝に対しては幾多の困難もあつた……（後略）。大正十四年、田熊出荷組合を設立し、田中清兵衛氏の指導の下、生産者一丸となつて大都市市場へと進出をはかり、あのアイディアと、緻密な企画と、人の輪を大切に作る人柄が、



▶千足屋の指示をうけてつくつた包装紙  
(昭和五年)

組合員の絶大な信頼と協力を得て組合の飛躍的発展とあわせ、八朔の販路も伸展していった……と、関係者の寄稿の文章が残ります。恵徳上人の後を継ぐ、田中清兵衛氏とその有志が後に、ハッサクを商いとして世の中に発信して



◀中橋千足屋（現・京橋千足屋）  
写真協力…株式会社京橋千足屋

行きます。その美味は大都市圏で証明され、全国に周知されていったのでした。後に田中清兵衛氏は「八朔の親」と称されるようになりました。